

交差点

秋田の役に立ちたい

鯨岡 修（昭和49年卒）

秋田産業サポータークラブは、秋田と首都圏をつなぎ、秋田県の産業全般に関する情報の収集や意見を集約し、今後の産業施策の推進に役立てていくことを目指して集う任意団体として2006年に発足した。秋田県出身者に限らず、さまざまな立場で秋田にゆかりのある方、秋田に関心を持つ方々が参加し、登録会員数は200名を超えているが、実際にアクティブに継続的に活動しているメンバーは30名ほどである。

発足当初は、首都圏在住のメンバーが集う構成であったが、コロナ禍でオンライン・ミーティングの機会が増え、その結果秋田県をはじめ参加する方のエリアの拡大という思わぬ副産物も生まれた。

さて、正直に申し上げると、私は決して模範的な会員とは言えない存在であった。どちらかといえば「名簿には載っているが、活動にはあまり顔を出さない人」という立ち位置だった。言い訳をすると、スタート時、私は50歳の現役バリバリ、秋田県東京事務所のある時間帯を考慮して午後4時からのミーティングに参加するハードルは相当高かったのである。そんな私が、長く関わってきたこともあり第四代会長を拝命することにいった。同級生の皆さんがこれを読んだら、「なぜアイツが？」と首をかしげている方もいらっしゃるだろう。私自身も少なからず同じ気持ちではあるが、せつかくいただいたご縁なので、背伸びをしすぎない範囲で務めていきたいと考えている。

私は秋田市で生まれ育ち、秋田高校を卒業後、大学進学を機に秋田を離れ、そのまま現在に至っている。気がつけば離れて半世紀以上という長い年月が流れ、

秋田との直接的なつながりは、今では両親の眠るお墓を訪ねることくらいになってしまった。

情報発信、つなぎ、積み重ね

一方で、不思議なことに、離れているからこそ見えてくる秋田の姿もある。ふとしたきっかけで耳にする地元の話題や、ニュースで取り上げられる秋田の取り組みに触れるたびに、「ああ、やはり自分にとって秋田は特別な場所」と改めて感じさせられる。そう思った思いが、このクラブと関わりを続けてきた理由だったのかもしれない。

秋田の産業に関する話題で頻繁に取り上げられるのは、人口減少や高齢化、低賃金といった、いわば「マイナス」の側面。確かにそれらは現実の課題であり、向き合わなければならない重要なテーマである。しかし一方で、近年はこれまでとは異なる新しい動きも生まれている。例えば、地域資源を生かしたユニークな起業や、新しい発想で地域課題に取り組む若者たちの存在は頼もしいものがある。こうした取り組みは決して派手ではないが、確実に秋田に新しい風をもたらしているように感じられる。

私自身、会長という立場をお引き受けするにあたり、こうした前向きな動きにどのように関わることができているかを改めて考えるようになった。この情報を発信すること、人と人をつなぐこと、そして小さな応援を積み重ねること——決して大きなことではないが、その積み重ねが、挑戦する人たちの支えになることを願っている。

クラブの活動の20年という年月は、決して短いもの

ではない。その間に社会環境は大きく変化し、地域を取り巻く状況も様変わりしている。一方で、秋田を思う気持ちや、何か役に立ちたいという志は、発足当初から変わることなく受け継がれてきた。むしろ今の時代だからこそ、そうした思いの価値はより一層高まっているのではないか。

新しい挑戦を続ける限り

これから先も、秋田を取り巻く環境は決して平坦ではないかもしれない。それでも、地域の可能性を信じ、新しい挑戦を続ける人々がいる限り、未来は決して暗いものではないと感じている。私自身も、これを支える一端を担う存在でありたいと思っている。

お読みいただいた同窓生の皆さまの中にも、それぞれの立場で秋田に思いを寄せていらっしゃる方が多いことと思う。関わり方は人それぞれだが、「気にかけること」や「応援したいと思うこと」自体が、きっと大きな力になるはず。

クラブの活動にちよつとご興味をわいた方、何か集まる機会があったら参加してみようと思った方、難しいことはともかくまずは秋田をネタに秋田のお酒を一緒に一杯やりたい方、どうぞお気軽にご連絡いただきたい。ホームページは <https://akita-support.org/>。秋田県のホームページは <https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/2404>

Profile



くじらおか・おさむ／1955年秋田市生まれ 早稲田大学政治経済学部政治学科卒 1978年日本経済新聞社入社
日経BP社、日経メディカル開発勤務を経て、2019年よりゲンゼ株式会社取締役（社外）